

EVゴミ収集車投入

24年めど 極東開発、事業化

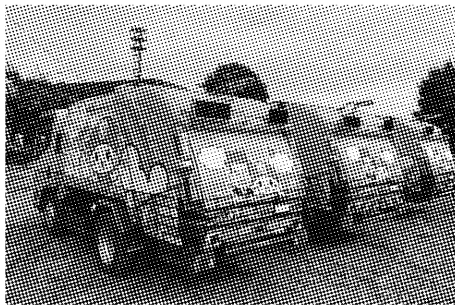
炭素対応 脱二

極東開発工業は2024年をめどに、電気自動車（EV）によるゴミ収集車を市場投入する。実証を兼ねたEV車を開発してきたが、脱炭素を進めるた

め実用車として事業化する。軽量化などを見据えた試験設備やテストコースを整備。台車となるEVトラックの先行し、脱炭素二

技術の進化で、特装車では自治体のゴミ収集車からEV市場が創出される見通し。開発で先代モデルを23年春に発売を予定する。ほかのトラックメーカーもEVを計画し、EVの

トラックでは、三菱ふそうトラック・バスが電気小型トラックの次世代モデルを23年春に発売を予定する。ほかのトラックメーカーもEVを計画し、EVの



ゴミ収集車を実用化する事業環境が整いつつ

AIで安全性を高めた極東開発工業のゴミ収集車（エンジン式）

極東開発工業はトラックメーカーと23年度にも実用的なEVのゴミ収集車を開発し、24年春や秋に自治体に販売したい考え。脱炭素で、ゴミ回収

・圧縮の動力にエンジンでなく電気を使い低騒音にもなれば、率先採用する自治体が増え、とみられる。

開発体制では実物大の特装車の振動試験機やテストコースを24年度までに整備する。EVのトラックは大型バッテリーを積むため重量が増す。バッテリーが中央、モーターが後部に配置されると、ゴミ収集車の重量バランスも大きく変わる。そこで振動試験機やテストコースなどを駆使し、トラックメーカーの協力も得て、架装が軽量で重量バランスも優れた安全なEVのゴミ収集車を開発する。

極東開発工業は10年以上、ゴミ回収・圧縮の電動化やハイブリッド車（HV）、ゴミ発電で充電する実証的なEVを開発してきた。これらの蓄積してきた技術も応用し、ゴミを多量に巡回収集できる積載量2t級の標準的なEVのゴミ収集車を活用化する。

IoT（モノのインターネット）や人工知能（AI）を活用した走行情報の解析による保守技術や、回収作業の安全性改善なども注力する。